慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国共産党と農民革命 : 研究状況と課題
Sub Title	The Chinese Communist Party and Peasant Revolution : a review
Author	高橋, 伸夫(Takahashi, Nobuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2002
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.75, No.1 (2002. 1) ,p.167- 197
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山田辰雄教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20020128-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国共産党と農民革命

――研究状況と課題――

高橋伸夫

はしめに
一　われわれの認識はどこまで来たか
（1）　多様な地域、多様な革命、物語の解体
（2）　「扱いにくい」農民たち
二　諸理論との対話
（1）　革命と階級
（2）　革命参加の動機
（3）　革命と農民の世界観、価値、行動様式
結論にかえて――いくつかの提案

はじめに

この小論は、主として一九三〇年代から一九四〇年代半ばにかけて中国共産党が農村部に築いた革命根拠地（以下、根拠地と略記する場合がある。また、辺区と呼ぶ場合もある）に関する、欧米と日本における近年の研究を概観しながら、中国革命の農村における起源、および党の農民との相互作用の性格、ひいては革命それ自体の性格について、現在までのわれわれの理解の到達点を整理し、さらに今後の研究戦略の展開方向について考察しようとするものである。(1)

一九八〇年代以降、欧米における中国革命研究は、中国共産党を成長と勝利に導いた決定的な要因を見極めようとする企てから離れて、各革命根拠地の内部的諸関係に関するどちらかといえばミクロな実証研究に向かった。日本においても、必ずしも数は多いとはいえないが、根拠地に関する一連の新たなタイプの研究があらわれた。これらの研究はいずれも中国で公表されたきわめて有用な根拠地別の新たな資料集を利用している。筆者自身も、新たに利用可能となった資料に依拠しつつ、一九三〇年代前半のいくつかの根拠地に焦点を当てて、党組織の内部構造、および党権力と農村社会の相互作用についていくつかの論文を発表してきた。(2) これらの新しい研究は、従来の革命の物語にたんに細部を付加しているに過ぎないのだろうか。それとも、物語そのもののラディカルな書き換えに導く可能性をもっているのだろうか。

研究の深化は、それぞれの研究が扱う地域、時期、さらには問題意識を相当程度分散させてしまった。いまや、それぞれの研究者は、革命根拠地のいずれかを研究上の「根拠地」に定め、そこにたてこもってしまったかのようである。それだけに、歴史学者からは性急すぎると批判されそうだが、各根拠地の特異性を束ねて中国革命についての新たな全体像を構築しなおす時期に来ているといえるだろう。これらの研究はいかなる点において接点

を持ち、また革命像の再構築へと導く可能性をもつのだろうか。

理論的な次元にかかわる問題もある。根拠地に関する個別的な研究の成果は、政治学上の、あるいは歴史社会学上の政治・社会変動の理論といかに対話可能なのだろうか。本稿では、まず近年の研究における基本的な合意事項と思われるものを取り上げて、その意味を議論し、次にこれらの研究成果を諸理論とつきあわせてみる。そして最後に、歴史のさらなる深層に降りてゆくためのいくつかの提案を行おうと思う。

一　われわれの認識はどこまで来たか

中国共産党と農民の関係についてのわれわれの認識はどこまで来ただろうか。筆者には、近年の研究において、少なくとも以下の二つの点は、研究者の間で、ほぼ共通の了解事項であるように思われる。すなわち、革命の地域的多様性、および共産党からみた場合の農民の扱いにくさである。

（1）多様な地域、多様な革命、物語の解体

まず、第一の点についていえば、革命根拠地の個別的研究の進展に伴い、共産党が推進した革命を、あたかも均質な一枚の布地とみなすことはますます困難になりつつある。研究者はむしろ、それをいくつもの布地を縫い合わせたパッチワークとみなすようになった。言い換えれば、革命は均質でも単一でもなかったというのである。

革命の地域的多様性に関する認識は、C・ジョンソンのペザント・ナショナリズム論に代表される単一要因によって共産党の成功を説明する方法が、根拠地の多様な現実に照らして説得力を失う過程で次第に鮮明となった。ペザント・ナショナリズム論では、日本軍の残酷な侵略に対して、生存の危機を感じ取った中国の農民が反射的

に原始的なナショナリズムの意識に目覚め、それを共産党が巧妙に利用したと想定されている。[3] この説明は、研究史の点からいえば、共産党の成長と勝利の説明にソ連の「陰謀」やレーニン主義的組織技術にかえて農民の反応を持ち込んだ点で画期的であった。[4] だが、この力強いが単純な図式は、現実にほとんど根拠をもたないことが次第に明らかとなっていった。

日本軍の侵略に対する農民の反応は、決して一様ではなかった。それは恐怖、逃亡、運命に身を委ねる態度から日本軍を挑発したレジスタンス勢力に対する反発に至るまでさまざまであった。[5] また、農民がナショナリズムという言葉にふさわしい意識を持つに至ったかも疑わしい。陳永発によれば、長江デルタ地域では、農民が初めて目の当たりにした新四軍を日本軍と勘違いし、日章旗を振り、日本軍が発行した良民証をつけて出迎えたのであった。[6] 国民政府が淮北において村落に自衛組織を作るよう指導したとき、これらの組織は日本軍に対するレジスタンスよりは略奪に走りがちであった。[7] さらに、仮に農民がナショナリズムに目覚めたとしても、それを共産党が有効に利用しうるかどうかは別の問題であった。日本軍の攻撃を受け止めた華北の根拠地では、共産党は農民を動員できるどころか、人も土地も兵士も失い、レジスタンスは崩壊寸前であった。[8]

かくして、日本軍の攻撃に直面した農民が一様の反応を示し、それを利用して共産党が飛躍的な成長を遂げるという図式は、ほとんど現実を反映していなかったことが明らかとなった。それ以来、研究者たちは、中国革命を締めくくる最後の言葉を発見しようと試みるよりは、革命の地域的多様性の承認に向かったのだった。

革命の地域的多様性は、各根拠地固有の地理的、社会的、経済的、文化的諸条件の差異とともに、そこで社会変革を成し遂げようとした革命勢力の政策的、制度的、あるいは組織的差異――それが意図的なものであったかどうかは別として――にも由来する。均質な農村に、均質な政策が適用されたわけではなかったのだ。根拠地固有の諸条件についていえば、R・サックストンが描く、塩の生産者が共産党の運動を支えた河北省・河南省・安

徽省の境界域に位置する根拠地の諸条件は、他の地域には見出しがたいものである。[9] E・ペリーが考察した匪賊組織と防衛的な秘密結社が繁茂し、伝統的に農民反乱の温床となった淮北の諸条件も独特である。[10] だが、これら北方地域の根拠地で活動する共産党員は、農業生産の形態が異なり、また同族結合がより強固な南方地域の根拠地とは異なる社会的環境のもとに置かれていたのである。

革命勢力の側の諸条件についていえば、共産党中央は疑いもなく各根拠地に統一された革命戦略を適用しようと試みた。だが、それはほとんど実現不可能であった。中国革命が、とてつもなく広大な地域で、満足なコミュニケーション手段をもたない勢力によって推進された事実を思い起こそう。党中央からの通信（そして資金）が各根拠地に遅滞なく、また完全な形で届いていたなどと考えることはできない。筆者がかつて一九三〇年代前半の鄂豫皖根拠地における党内コミュニケーションに関して行った調査によれば、党中央から根拠地にある政策文書が到達するまでに数ヵ月、根拠地内部に行き渡るのにさらに数ヵ月を要し、しかもその過程で少なからずの文書が伝達されなかった。[11] この状況が一九三〇年代後半以降、日中全面戦争の展開にもかかわらず、劇的に改善されたと考えるのは無理がある。仮に、幸運にも党中央から政策文書が根拠地に届けられたとしよう。この文書を待ち受けていたのは、田中恭子氏が指摘するような、「小さな変更、非公式な変更、地方レベルの変更、さらに政策変更なしの実施上の手直し」であった。[12] したがって、根拠地で政策が実行に移されたとき、それが当初の意図からはかけ離れたものになる可能性がつねにつきまとっていた。かくして、各根拠地の共産党組織は、厳格に統合されていたというより、それぞれの社会・経済的諸条件において、独自の判断と独自の資源に依拠しつつそれぞれの革命を展開していたと考えたほうが真実に近いように思われるのである。

もし多様な革命の総和として中国革命を理解するなら――ここではあくまでも空間的な多様性のことをいっているのだが――党が農民を引きつけ、動員する複数のパターンが存在した可能性を考慮しなければならない。そ

して、われわれは必ずしも延安が置かれた陝甘寧辺区を典型だと考える必要はない。[13] だが、複数のパターンが存在するとしても、根拠地の数だけ、さらには、ひとつの根拠地の内部にさえヴァリアントが存在したと想定すべきなのだろうか（実際、ひとつの根拠地といえども、その一部が他の部分から孤立してしまう事態は珍しくなかった）。もし基本的なパターンを抽出できるとすれば、それはいかなるものだろうか。われわれは、革命の地域的多様性を視野に収めながら、なおかつそれらをひとつの革命の物語に包摂しうる原理の存在の可能性に注意を払う必要があるのである。

とはいえ、単一の革命という物語の解体は、いまや二重のレベルで進みつつある。ひとつはすでに述べた空間的なレベルでの解体だが、もうひとつは「革命」それ自体の解体である。すなわち、われわれはますます中国革命を過去とのはっきりとした断絶において語ることが難しくなっているのである。陳永発が示した陝甘寧辺区におけるアヘン栽培は、そのもっとも象徴的な例である。[14] 一部の根拠地におけるアヘン栽培だけではない。さまざまな改革の過程に忍び込む宗族結合の作用、女性の伝統的役割の温存、宣伝における「封建迷信」の利用など、根拠地の社会が伝統中国との多くの連続面をもつことに、いまや大きな関心が向けられるようになった。[15]

とすれば、極端な話、われわれの研究は今後、根拠地別に、省別に、県別に、さらには村別に党―農民関係を記述し、しかも革命が伝統との断絶ではなく連続のうえに成り立っていたことを強調するかたちで進められることになるのだろうか（実際の研究状況は、まさにこのような方向に進みつつあるようにみえる）。われわれはどこまで革命の物語を解体すればよいのだろうか。そして、われわれはまだ単一の中国革命について語ることができるだろうか。

しかし、ともかくも一九四九年一〇月の事態は生じたのである。いかなる原理が、革命の物語を無限の断片化から救い出すことができるだろうか。少なくとも、二つの方向性が示されているようにみえる。第一は、根拠地

の多様な状況に適用しえた共産党の戦略的・戦術的柔軟性を強調することである。つまり、中国の共産主義者たちは、現実への柔軟な対応という点において一貫していたというのだ。セルデンのみるところ、共産党の統一戦線政策のもとでエリートを含む広範な階級連合が形成され、それが農村内部の社会的・経済的改革を通じ、ゆっくりとした権力状況の変化に導くことによって、共産党への支持が形作られたのであった。[16] とすれば、農村内部のエリートを疎外することなく、したがって階級闘争を抑制しつつ、多階級連合を形成し、社会的・経済的・行政的改革に取り組んだことが共産党の成功の秘訣だったのだろうか。階級闘争の抑制だけではない。共産党は、それがいかに自らが掲げた理念からかけ離れていようと、必要とあればアヘン栽培も奨励できたし、秘密結社や匪賊集団と同盟を結ぶこともできた。華北に進出した旧日本軍の岡村部隊が発行した雑誌は、いくらか賛嘆を込めて、中国共産党の「変幻自在の戦術」、「その便乗する同地方の特性を巧みに利用する方便」、「実情に応じた民衆獲得」に言及している。[17]

だが、共産党の政策はいつでも、どこでも柔軟だったのだろうか。もしそうだとすれば、一九二〇年代後半から各根拠地で繰り返されてきた数々の「左傾の誤り」（それは行き過ぎた粛清や、社会的混乱と生産の停滞を招いた土地改革に代表される）はどう説明すればよいのだろうか。田中恭子氏が描く土地改革のなかで反復された過程――党が「行き過ぎ」を黙認あるいは奨励し、打撃対象が地主と富農を超えて中農にまで及び、生産が停滞し、恐怖と怨恨が農村を支配するようになって党がようやく「右」に舵をきるという現象――をみると、「柔軟な」政策と「硬直した」政策が交互に現れるといったほうがよいように思えてくる。[18] 丸田孝志氏も陝甘寧辺区におけるスパイ摘発運動（鋤奸政策）の過程に現れた拡大化と穏健化のサイクルを描いている。[19] 両氏の研究は、異なる政策領域を観察しながら、そこに共通した政策過程が存在したことを示している。すなわち、多少の行き過ぎを組み込んだ政策――それ自体としては、「押し」と「引き」を弁証法的に組み合わせた洗練されたものであ

る――が意図と予測を超える展開を示し、過度の混乱をきたすと穏健化が図られるという循環である。つまり、一貫していたのは柔軟性ではなく、サイクルなのである。中華人民共和国建国後にも現れるこのような政策上の振り子現象がいかに生じたのかは興味深い問題だが、筆者にはそれを生み出す要素は、党上層指導者のイデオロギー上の原理主義的態度、ノルマを果たそうとする中間・下級幹部の使命感、焦燥感、恐怖（ノルマを完遂できなかった際の）の混合物としての心理、運動に便乗して何らかの利益を引き出そうとする人々、そして運動の拡大に伴う混乱あるいは悲劇的結末、であったように思われる。党はあえて「行き過ぎ」を政策に組み込むことで、結果的に自らが統御しえない要素を政策過程に介入させることになり、政策上の循環を作り出していたのである。したがって、いかに多少の混乱が予期されていとしても、党がこの過程全体をあらかじめ十分に思い描くことなど不可能だったように思われる。むしろ、われわれは共産党が試行錯誤を繰り返すうちに――いきあたりばったりに――幸運にも勝利を探り当てたとみることもできるのである。

第二の方向性は、まだたんなる提案の域を出ないのだが、単一の革命という言説が当時担っていた作用に着目することである。たとえ現実にはそれぞれの地域でそれぞれの革命がたたかわれていたとしても、それを指導しようとした人々、また革命に身を投じた知識人や青年にとっては、それはまぎれもなく「救国」と根本的社会変革が結びついたひとつの革命であった。彼らはひとつの革命の名のもとに馳せ参じ、そして革命の大義に従おうとしたのであった。したがって、J・ワッサーストームが指摘するように、革命の言説やシンボルの機能の分析に向かう必要があるのである。[20]

（2）「扱いにくい」農民たち

壮大な単一の革命物語の解体は、研究者たちを各根拠地における共産党と農村の住人たちとの間のミクロな相

互作用の分析に向かわせた。そのとき、研究者たちは、革命が構造的条件に運命づけられて自動的に進行する過程というより、革命勢力が伝統的農村社会の住人を素材として革命を一歩一歩創り上げてゆく困難な過程に関心を向けたのだった。もはや革命は「起きる」ものではなく、「起こす」ものと理解され始めたのである。ここでは党と農民の間に自然な利害の調和があったとは考えられていない。農民の革命の意志は与件ではなくなったのである。比喩を用いよう。共産党は乾いた藁の山に点火したのではない。湿った藁の山に点火しようと努力したのである。

いまや意志と主体性が認められた農民と党の相互作用を語る際、両者の間にある種の交換関係が成立していたとする観点は魅力的である。[21] 共産党によって提供されるさまざまな誘因と、農民が提供する支持および運動への参加が交換されるのである。筆者の考えでは、共産党が農民を引きつけるために提供できる誘因には、大きく分けて次のものがあった。[22]

① 理念あるいはイデオロギー

② 安全

③ 物質的・直接的利益（金、土地、食糧、種子、家畜、衣服など）――J・ミグダルのいう「即効性の選択的インセンティブ」[23]

④ 制度（自由な婚姻、減租減息、互助組など）――長期的に見れば、これらは物質的、金銭的利益となりうる。短・中期的には不利益や危険の軽減に役立つものである。

⑤ 権力あるいは地位と名誉

個々の誘因で農村社会のいかなる人々をどのように引きつけることができたか、初歩的な考察を加えておこう。すでに述べたように、日本軍の侵略に直面したすべての農民が反射的にナショナリズムに目覚めたわけではなか

ったが、だからといって、共産党の民族主義的アピールが農村社会にいかなる反応も引き起こさなかったというわけではない。だが、理念やイデオロギーは、他の誘因と組み合わせて用いない限りは、ごく限定された範囲の人々――農村では戦略的な位置を占める人々かもしれないが――しか引きつけることができなかった。ハートフォードによれば、抗日戦争の初期、晋察冀辺区において共産党の民族主義的主張に感応したのは、農村の教養ある上層の人々にすぎなかった。(24)

直接的利益の分配は、それだけで農村の遊民無産階級を引きつけることができた。(25) だが、貧農や雇農は、たとえ直接的利益の分配が行われたとしても、階級闘争には及び腰であった。彼らはもともと地主と富農に対して階級的憎悪を持ち合わせていたわけではなく、むしろこれらの階級とさまざまな社会的絆で結ばれていた。加えて、共産党の支配の永続性が疑わしく思われる時、地主と富農の報復を恐れることなく闘争に立ち上がることはできなかった。(26)

少なくとも、彼らを階級闘争に立ち上がらせる必要条件のひとつは、安全の確保であった。すなわち、物質的利益の分配に先立って、あるいはそれと同時に農民の安全が確保される必要があった。したがって、共産党の軍事的ヘゲモニーに裏づけられた根拠地の安定が前提条件となったであろう。

党が分配しうる資源は、村落内の富の再分配による限りは、早晩枯渇する運命にある。資源の再分配は、打撃対象を拡大することによってのみ継続しうるが（このために「左傾」の落とし穴――地主、富農のみならず、中農、さらには貧農にまで打撃が及ぶ危険性――はつねに党を待ち構えていた）、この対象は無限に拡大できるわけではない。党は分配しうる資源が底をつく前に、支持を制度化しなければならない。党が作り上げた制度を利用して負担の軽減や利益の確保を目論み、また党が作り上げた諸組織の階梯を利用して社会的上昇を図ろうと目論む人々が多数出現することによって党の支配は安定に向かうが、これは実効支配の継続の結果でもある。ゆえに、ここでも

また軍事的ヘゲモニーに裏づけられた安全の確保が重要となる。

以上の議論は、根拠地の個別的実証研究を積み重ねることによって、さらに精緻化することが可能である。こうしてわれわれは、いかなる誘因でいかなる人々を引きつけることが可能であったか、そして共産党ととりわけ密接な関係を持つ（諸）階級、もしくは（諸）集団の組合せを特定し、それらの登場と退場を時間の経過に沿って示す、という研究戦略をもつことになる。このような「社会的交換」の概念に基づいた研究戦略は、党に対する多様な支持の形態が並存した可能性を示し、かつ動態的に党―農民関係を把握することを可能にするだろう。だが、この戦略の前提には根本的な疑問もある。果たして当時の状況下で、農民が党の諸政策の利害得失を合理的に計算し、その結果に基づいて支持およびその形態を決定した、などということがありうるのだろうか。第一に、党が提供する誘因の利害得失に関する冷静な計算が可能だったとは考えにくい。戦争による混乱のもと、未来の支配者が現在と同じであるとは誰にも保証できなかったし、また党の政策は常に変更を余儀なくされていた。したがって、政策の利害得失を見定めるには、あまりにも予測可能性が限られていたのである。それにもかかわらず、第二に、ある地域を一定期間、共産党が支配していたとすれば、その政策がいかに不利にみえようとも、農民にとってそれを明白に拒否するという態度表明はほとんど不可能だったのではあるまいか。農民は共産党を選択によって支持したわけではない。彼らにとって、党は支持できても、拒否できない存在であった。この場合、そもそも「社会的交換」など問題にならないであろう。さらに次のような可能性も考えられる。すなわち、農民の党に対する支持は、周囲の社会的環境に同調するための手段、つまり農村における諸集団内での良好な関係を維持するための道具になっていた可能性である。この場合も、たとえ誘因の提供がなくとも、党に対する支持の提供はありうるのである。とすると、党にとって、実力による支配さえ確かなら、農民は必ずしも「扱いにくい」存在だったとはいえないかもしれない。もっとも、この場合でも農民の党に対する支持は、従来考えられて

きたものよりはるかに相対的な性格を持つであろうが。

「社会的交換」と実力による支配――このどちらが党と農民の関係の性格をよりよく説明するだろうか。いずれであるにせよ、筆者には、やはり農民は「扱いにくい」存在であったように思われる。実際、農民は必ずしも党の思い通りにはならなかった。農民たちは、しばしば党の意図と予測を超えて急に走り出した。ハートフォードが指摘するように、「彼らは村々における自身の潜在力に気づいたとき、よりいっそう過激な手段を要求し実施し始めた」のだった[27]。その結果、貧農たちはしばしば一握りの地主たちにすべての税負担を押し付け、また地主と富農からありったけの穀物を奪い取ろうとした[28]。だが、農民たちは突如立ち止まることもあった。村落において、たとえ現象的には急進的な階級闘争が現れても、工作隊が村から去れば、闘争は維持できなくなることがあった[29]。加えて、しばしば行なわれた政策の方向転換にうまく農民を誘導することもままならなかった。共産党による農民の急進主義の抑制は、党に対する農民の不信感の増大という代償を伴うことがあった。ハートフォードによれば、晋察冀辺区においては、このようにして生まれた党に対する不信感と日本軍による物理的圧力が、農民の運動への参加に対する留保を生み出し、その結果、党は少数の党員、幹部に依存を深めざるをえなかったのであった[30]。さらに、農民は党の政策の目的を勝手に読み替えて、政策を自己の（あるいは自分が属する集団の）目的のために流用することがあった。地主階級に対する闘争を「千載一遇の発財のチャンス」とみて、闘争に依存して暮らそうと目論見る農民が現れたのはその一例である[31]。

党と農民の結合の性格に関する議論の深化は、党の成功と勝利に関する議論を新たな段階に推し進めた。ペザント・ナショナリズム論以降の議論は、農民の党に対する広範で持続的な支持をほとんど自明のものとみて、そのような支持が何に由来するかを問題の中心に据えてきた。この点を説明できれば、党の成功の説明としては十分だと信じられてきたのである。ところが、いまや相対化された農民の支持を共産党の勝利と直接的に結びつけ

るわけにはいかなくなった。この両者を結ぶ接続詞は、もはや「のゆえに」ではなく、「にもかかわらず」なのである。ハートフォードの見解では、晋察冀辺区においては、党は広範な農民の支持を受けなかったし、また追求もしなかったが、それにもかかわらず勝利を収めることができたのであった。少数の党の信奉者、特定の政策に対するアドホックな支持者、そして直接的・間接的な強制によって従う人々が存在すれば、勝利には十分であったというのである。彼女のみるところ、勝利への道は、農民大衆に大いに歓迎される政策を採用して、一時的に農民大衆の広範で強力な支持を形作ることによってではなく、そのような政策によって農村エリートを敵の側に追いやることがないよう細心の注意を払い、一歩一歩敵の力を削いでいくことによって切り開かれたのであった。[32]

農民の支持がいかに相対的性格をもっていようとも、時間の経過とともに、彼らは次第に「改造され」、党の勝利を可能にする強固な支持基盤を形成したと理解することもできる。田中恭子氏によれば、農民は繰り返される闘争の過程で、旧支配層が尊敬に値しないことを知り、また村落の伝統的秩序の破壊に公然と手を貸すことで、後戻りができなくなり、共産党と利害、運命を共有するようになるのである。[33] だが、党に対する農民の広範かつ強固な支持が事実として存在したとしても、それが党の勝利の原因であるのか結果であるのかを判断することは難しい。また、党の勝利を必然ならしめるような農民の支持を想像することも難しい。恐らく、われわれはハートフォードにならって、限定された支持の基礎のうえに、いかなる政治・軍事戦略の組み合わせが党を勝利へと導いていったかを問題にするほうがよいであろう。

二　諸理論との対話

おそらくほとんど誰も反対しないだろうが、中国革命の研究者は、自らを革命の比較研究からは隔離する傾向にあった。とりわけ日本においてはそうである。マルクス主義の影響が顕著であったためか、それとも日本の中国研究者に特有の理論嫌いのためか、あるいは彼らが理論の構築と洗練に手を貸すよりも、理論の不備を指摘することに満足を見出してきたためか、それ自体説明を要する現象であるに違いない。[34] だが、社会科学上の諸理論との対話から得られるものは少なくない。いうまでもないことだが、中国革命の多様で複雑な現実を、普遍的な適用可能性をもつ理論図式に押し込める必要はない。現実をさらに深い次元で把握するために、理論の助けを借りることが有益なのである。ここでは、主として相互に関連する三つの問題に関して、革命の比較政治学的、あるいは歴史社会学的研究の諸理論と、現在までの革命根拠地の実証研究の成果とを照らし合わせてみようと思う。

（1）革命と階級

第一の問題は、いかなる階級（あるいはその組合せ）、もしくは社会的範疇が革命を支えたのか、という点に関するものである。周知のように、毛沢東は貧農こそが最も革命的な階級だと主張した。一九二七年、彼は有名な「湖南農民運動視察報告」で次のように述べていた。「貧農階級がなければ（紳士たちのことばでいうと、ごろつきがなければ）、現在のような農村の革命情勢は決して作り出されないし、土豪・劣紳を打倒して、民主主義革命を成し遂げることも決してできない。貧農（とくに赤貧のもの）が最も革命的であるからこそ、農民協会の指導権を勝ち取ったのである。……貧農がいなければ、革命はありえない。彼らを否定することは革命を否定することになる」。[35] その一方、彼によれば、中農の革命に対する態度は終始動揺を免れないのだった。だが、E・ウル

フの見解では、まさに中農こそが革命の主たる担い手たりうるのである。彼のみるところ、中農は農村に対する資本主義の浸透にもっとも脆弱で、また発展するプロレタリア階級からの影響をもっとも受けやすいがゆえに、もっとも革命的潜在力を有しているのである。[36]

だが、革命根拠地に関するいかなる研究も、共産党と農村における特定の階級の「自然な」結びつきを実証してはいない。研究者は、政策的選択の結果、特定の階級が党員・幹部の隊列を満たすようになる事態を示すことができるだけである。ビアンコによれば、どの根拠地でも、最初に党のもとに集まるのは貧農ではなく、むしろ生産活動と関連を持たない周辺的な人々であるが、後に彼らは排除されるのである。[37] ハートフォードも、抗日戦争の終了までに、晋察冀辺区の党員・幹部のなかで貧農が圧倒的な比重を占めるに至ることを示しているが、それはあくまでも党の選好の結果なのである。[38] とすれば、経済構造に占める位置によって、特定の階級が共産党と強固な同盟を結ぶようあらかじめ運命づけられていると想定する必要はないのかもしれない。

むしろ、党と「自然に」結びついたのはさまざまな階級だったと考えたほうがよいのではあるまいか。筆者はかつて、一九三〇年代前半の鄂豫皖根拠地において、少なからずの党委員会が実際には地主、富農、紳士、道士、商人、流氓などさまざまな社会的背景の持ち主によって構成されていたことを示した。これは入党に際して、資格審査が排除すべき階級を識別し、濾過する機能を満足に果たしていなかったことと関係があった。[39] だが、それだけではなく、中国農村に特徴的な階級的流動性の高さを反映していたのかもしれない。[40] 階級的流動性が高い状況では、党が特定の階級と結びつくのは難しくなる（そもそも、個々の農民の階級所属を厳密に特定することは困難である）。さらにいえば、このような革命の隊列の階級的雑居状態は、さまざまな階級が、党と関係を結ぶことを通じて利益を確保しようと戦略を発動した結果であったと考えられる。いかなる理由によるのであれ、党が排除したいと願う階級が革命の隊列に確実に忍び込んでいたことは、党の推進しようとした社会改革の一部を

骨抜きにするのに十分であった。例えば、土地改革の実施は暗礁に乗り上げるか、実施された場合でもその果実は、しばしば貧農と雇農ではなく、地主と富農によって刈り取られたのであった。[41]

このような状況は、その後どこまで克服されたのだろうか。統一戦線政策のもとでの多階級連合の形成は、われわれがこの点を見極めることを困難にしている。だが、少なくとも多階級連合は、意図的に創り出すまでもなく、以前から存在した革命陣営の階級的雑居状態を延長するだけでよかったのである。とすれば、革命の隊列は相変わらず貧農階級のみならず他の諸階級の戦略に開かれていた可能性がある。[42]

とはいえ、共産党がどの程度、自らの同盟相手の選択能力を有していたか（逆からいえば、共産党が革命の隊列から排除しようとした諸階級が、どの程度革命陣営への浸透能力を持っていたか）を確認するには、さらなる個別的実証研究を積み重ねる必要がある。その際、われわれは必ずしも階級という範疇にこだわる必要はないのかもしれない。おそらくは、他の社会的範疇――例えば、未婚者と既婚者、青年と年長者、女性と男性など――にも同様の注意を払う必要がある。ビアンコは、多くの若者――富農、中農、貧農を問わない――が共産党の政策を進んで受け入れた態度は、大部分の年長者が示した懐疑的な態度と対照的であったと述べている。[43] 筆者自身も、党の打ち出したいくつかの政策に対する敏感な共鳴版としての青年と女性の役割を指摘した。[44]

こうして、われわれは農村における特定の社会階級と外部勢力の「自然な」同盟が革命を一定の方向に推進するというのではなく、さまざまな集団がさまざまな目的を遂げようとせめぎあう空間として――したがって、不確実性が作用せざるをえない空間として――革命を捉える視点を得るのである。

（2） 革命参加の動機

もし、階級構造の観点から農民の革命への参加を説明しにくいとすれば、われわれにはいかなる方法が残って

いるだろうか。構造主義的な説明がうまくいかないのであれば、行為者の意志や観念の世界に足を踏み入れる必要がある。その際、疑いもなくJ・スコットのモラル・エコノミーの概念とS・ポプキンの合理的農民の概念は議論の手がかりを提供してくれる。スコットは、伝統社会において精巧に組み立てられている生存保障のシステムが脅かされたことに対する、農民による原状回復の企てとして反乱を理解すべきことを説いた。[45] 他方、ポプキンにとっては、農民の行動は徹頭徹尾、打算に基づく個人的行動なのである。農民の反乱への参加は、外部の指導者が十分な誘因を提供し、かつフリーライダー出現の可能性に関する農民の相互不信を克服させ、集合的行動への参加が個人的利益にかなうことを確信させた結果なのである。[46]

党と農民の結びつきは、農村社会のモラル・エコノミーに、いいかえれば「公正な社会」に関する農民の伝統的な観念に媒介されていたのだろうか。つまり、農民は脅かされた生存維持システムの回復のために外部の指導者に接近し（あるいは招き入れ）、党は農民のモラル・エコノミーに訴えることで支持を獲得したのだろうか。モラル・エコノミー論の暗黙の前提は、生存維持のシステムが村落に単一であり、村落の構成員がほぼ例外なくそのシステムに取り込まれているということである。しかし、主として一九三〇年代前半の江西ソビエト区における農民の生存維持戦略を検討したJ・ポラチェクによれば、そのような単一のシステムを考えることは困難である。彼のみるところ、農村社会は決して一枚岩ではなく、何らかの理由で危機に直面した際、異なる集団が相互に対立する生存維持の諸戦略を発動する。したがって、村落に統一されたモラル・エコノミーの復元能力を見て取ることは難しい。そして、共産党は村落内部における既存の対立構造の一方に加担する——周辺的農民の側に加担する——形で支持を得ようと試みたのであった。[47] この場合、党は共同体的なるものの守り手として振舞うのではない。むしろ、その裂け目から村落社会に入り込み、足場を築くのである。

では、きわめて常識的な理解に従って、村落の共同体的伝統が弱体であればあるほど党の浸透は容易となり、

逆にそれが強固になればなるほど浸透は困難になったと考えるべきだろうか。そこには、いかなる逆説も含まれてはいなかったのだろうか。中国村落が一般に共同体的伝統が脆弱だと考えられるため、比較に好都合な事例を見出すことは難しいが、強靱な共同体的伝統が共産党の浸透に積極的な役割を果たしたとは考えにくい。実際、党が同姓村で工作を進めるのは困難であった。[48] おそらく、党にとって共同体的なるものを利用して農民をひきつけるのは難しかったし、農民も共同体原理に媒介されて党に接近したとは考えにくい。

ならば、党は共同体に媒介された農民を引きつけたのではなく、あくまでも個人的な利害得失の計算に従って動くばらばらな農民を引きつけたのだろうか。このようないささか極端な見解への賛同者は見出しがたい。研究者たちは、中国の農民たちがさまざまな社会的結合のなかで決定し、行動しなければならない点を強調している。[49] たしかに、利己主義と相互の猜疑心に満ちたポプキン的農村社会のイメージは、当時の中国における農村の現実には合致しそうにもない。中国の農村においては――他のあらゆる地域の農村も同様であるかもしれないが――農民が一体として行動するには、農村社会内部が引き裂かれすぎているし、逆に個人が単独で行動するには、彼らはあまりにもさまざまな紐帯に縛りつけられすぎているのである。

階級も、超階級的な共同体の作用も、純個人的な打算も、農民の革命への参加について満足しうる説明を提供しないとすれば、われわれには何が残っているのだろうか。筆者には、農民の参加を説明する単一の簡潔な図式を思い浮かべることはできない。筆者が示すことができるのは、農民の計算の複雑さ（ときにはその裏返しとしての単純さ）だけである。共産党は農民に対してさまざまな誘因を提供することができた。だが、党の支配が将来にわたっても保障されているかは不明であり、しかもその政策は突如変化した。したがって、農民にとって予測可能性はひどく限られたものであった。それでも、党が実力を背景に農民に語りかけ、また党の提供する誘因から少なくとも短期的な利益を引き出すことが可能だった以上、農民は党の推進する運動と関係を持たざるをえな

かった。その際、農民は純個人的な利害得失の計算に基づいて行動することはできなかった。彼は家族の、宗族の、対面集団の、同世代の、同性の一員として、さまざまな社会的絆のなかで計算しなければならかった。だが、ときに彼はそうした絆を断ち切るために行動することがありえたし、一切の計算を度外視して革命に身を投じることもあったかもしれない。そこには構造的に規定された一般的な計算規則があったようには思われないのである。

(3) 革命と農民の世界観、価値、行動様式

第三の問題は、革命勢力との接触を通じて、農民の伝統的世界観、価値、行動様式がどの程度変化したかという点に関わる。この問題は、革命がどの程度歴史に断絶を持ち込むことができるかというより大きな問題の一部である。

歴史的に中国で農民反乱が繰り返されてきたことはいうまでもない。だが、多くの論者が指摘するように、伝統的な農民反乱を支えた世界観、価値、行動様式は革命には適合的ではない。一般的にいって、反乱の参加者の視野は地方的に限定されている。また、彼らの動機は本質的に防衛的な性格をもち、自らの過去――想像上のもしくは事実としての――への復帰を目的としている。その意味で、彼らは「後ろ向き」である。そうであるがゆえに、E・ペリーが淮北の事例で示したように、伝統的な反抗の諸形態は革命に対してむしろ阻止的に作用するのである。[50] 革命の参加者は現状の破壊、あるいは過去との断絶を志向しなければならない――その意味で「前を向いて」いなければならない。したがって、反乱の指導者は伝統社会の内側から供給されうるが、B・ムーアやE・ウルフが主張するように、革命の指導者は外側から与えられる。[51]

反乱の参加者と革命の参加者の間に「内面意識における質的な飛躍」[52]を想定するこのような図式は、どの程度

妥当性をもつのだろうか。明らかに変化した村内の権力者の顔ぶれや制度や組織は別にして、中国の農民の世界観、価値、行動様式は、革命勢力との接触によってどの程度変化したのだろうか。革命根拠地の農民に関する観察は、例によって地理的にも時期的にもさまざまであり、かつ断片的なものでしかない。筆者は一九三〇年代前半の鄂豫皖根拠地における一般党員の文化的役割について考察を加えた際、彼らが新しい文化の使徒として振舞うよりは、むしろ多くの場合、革命の衝撃から伝統文化を保護する役割を果たしていたと述べた。筆者の見解では、根拠地における文化的亀裂は、一般党員と農民の間に走っていたというより、むしろ党組織の内部において、県委員会とそれ以上の機関との間に走っていたのである。[53] 筆者は、抗日戦争期およびそれ以降の時期においてはやがて克服される運命にある一時的な傾向をみたのかもしれない。だが、多くの研究者は、抗日戦争期および内戦期の共産党支配地域の生活において、伝統的な観念や行動様式が至るところに顔を出す様子を描いている。佐藤宏氏は延安周辺地域の農村について、土地改革後、実力者は人的に断絶しても、村外に対する「村本位主義」と村内における「人情私意」の連続性が確認できるとしている。[54] 川井伸一氏も戦後の土地改革において、伝統的血縁関係がその過程のなかに入り込み、さまざまな作用を果たす様子を描いた。[55] K・A・ジョンソンは根拠地における女性の立場と役割を扱った著作で、女性の解放と権利の獲得に向けられた運動が、つねに革命運動の利益に従属させられ、伝統的な女性の役割がかえって強化されることさえあったと述べている。[56] E・ペリーによって紹介された第二次大戦終了直前の淮北辺区に関する資料は、郷レベルの幹部二八一名のうち、七〇パーセントが何らかの「封建的結社」に加入していたことを示している。[57]

だが、華北に進出した旧日本軍の眼には、中国共産党員が他の人々と異なる気質を備えているように映っていた。岡村部隊の出版物は、「中国共産党員の鑑別法」なる文章において次のように述べている。「共産党員は一種の志士的自負心を有し且反抗心熾烈なるを以ってかかる自負心、反抗心即ち所謂党員気質は必ず日常の挙動態度

に現れる」[58]。しかも、この文書は党員としての訓練がより行き届いた「軍隊党員」とは区別される「一般党員」について語っているのである。もちろん、「一般党員」の多くは農民あがりの、しかも党歴の浅い人々で占められていた。

以上の地理的にも時間的にも異なる観察結果から一般的結論を引き出すのは、時期尚早というべきだろう。だが、われわれの考察の基礎となる考え方は、次のようになると思われる。すなわち、農民は党が農村に持ち込もうとした文化に適応を迫られたが、他方で党は農村の伝統文化にある程度適応することを余儀なくされていた。これは党が辺鄙な農村の環境下で二〇年間も生存し続け、大部分の党員と兵士を農村の諸階級から引き出していたことを考えれば当然である。また、農民の少なくとも一部は、革命を利用して自ら伝統文化からの脱却を図ったが、党は伝統文化の少なくとも一部を意図的に温存したのであった。われわれは党がつねに伝統の破壊者で、農民がつねに伝統の守り手であったなどと考えないようにしよう。農民の一部は外部の勢力と結びつくことによって、積極的に自らの過去からの脱却を試みようとした。党が掲げた婚姻の自由に対する若い女性たちの熱狂的な歓迎ぶりや、青年たちの伝統文化に対する過激な攻撃はその例である[59]。一方、すでに述べたように、党は革命を進めるために、アヘン栽培にせよ、女性の伝統的役割の温存にせよ、意図的に農村の伝統の一部を利用しようと試みた。しかも、話はさらに複雑になるのだが、党が農村の伝統を破壊しようとした場合でも、意図に反してかえって伝統を強化してしまうことがあった。川井伸一氏によれば、同姓村の場合、外部からの土地改革圧力は宗族結合をむしろ強化する方向に導いたのであった[60]。筆者自身も、地縁・血縁による紐帯、地方主義、パトロン・クライアント関係に基づく結合、個人的報復などの旧い価値と行動様式が、それを破壊するはずだった新しい形式――ソビエト、土地改革、紅軍擁護運動など――を本来の目的とは別様に用いて、かえって自己主張を行った可能性について指摘した[61]。その結果、根拠地の農村には一見新しい制度、新しい組織、新しい語彙と象徴が

行き渡りながら、その背後には社会結合の形態や農民の価値と行動様式などの面で強固な連続性が残されたのである。この断絶面と連続面の配置状況、およびその変化は、恐らく誰によっても計画できなかったし、統御することもできない性質のものだったに違いない。

結論にかえて――いくつかの提案

今後の研究におけるアプローチの基本的な骨格は、いかなるものになるだろうか。ささやかだが三つの提案をしておこうと思う。第一に、農民の戦略に開かれた社会的・政治的空間として根拠地の党－農民関係を描き出す必要がある。これこそが農民を真に革命の「主体」たるにふさわしい位置に押し上げるものである。これまで、われわれは中国革命の主たる「担い手」が農民であったことを認めながら、彼らにその地位たるにふさわしい扱いを与えてこなかった。われわれは農村内部の住人よりは、もっぱら外部からやって来て彼らを「指導」する人々――共産党――に焦点を当ててきた。共産党の表明するイデオロギーや、政策や、指導者集団の構成の変化などがおなじみの問題であった。他方、農民の実際の行動様式、心性、動機などが問題となることはほとんどなかった。これは怪しむに足りない。何よりも、地方的でミクロな状況を解明するための資料が限られていたし、たとえ資料が存在したとしても、彼らと党の利益が基本的に一致しており、彼らの願望と行動が結局は党の標榜するイデオロギーと政策の言葉によって説明できると想定される限りで、農民の行動様式を解明したり、彼らの内面に立ち入ったりする必要はなかったのである。だが、いまや農民が唯諾々と共産党に従うのではなく、一定の能動性と積極性をもって政治的ゲームに参加する主体であったことが理解された。そろそろ彼らに革命の「主体」たるにふさわしい位置を与えてやるべき時ではないだろうか。革命の政治的・社会的空間は、党と農民の双

方の意志と創造力に開かれていたのである。このようにいえば、農民による党の操作可能性を過大評価しているとの批判を受けるかもしれない。だが、党と農民が決して対等の立場でゲームを行ったわけではないことを忘れないでおけば、農民の能力を認めないよりはずっとましである。[62] 同様のことが、農民に比べてさらに研究が遅れている都市の労働者に対してもいいうるだろう。

だが、農民と労働者を語るだけでは十分ではない。実は、われわれは農民と労働者のみならず共産党の構成員についても語ってはこなかったのだ。党の頂点部分における人的構成と、彼らが表明するイデオロギーと政策、およびその変化が理解できれば、共産党とその運動を理解できるなどというイメージはもはや過去のものとなった。筆者の見解では、全能の頂点から厳格に統制される一枚岩のレーニン主義的組織というイメージほど、当時の中国共産党の実態からかけ離れたものはない（同様のことが国民党についてもいえるかもしれない）。その組織は、「硬い」どころではなく、いわば薄い浸透膜に覆われ、さまざまな社会的背景を持った人々に開かれ、また構成員も流動的であった。[63] したがって、今後の研究においては第二に、党員の社会学的分析が、さらには文化人類学的分析が必要とされるであろう。われわれは一般党員の階級的背景や行動様式や心性や動機について、また党組織がどの程度徹底した社会的・文化的混交の場――農村の伝統文化と都市の新しい文化、農民文化とマルクスレーニン主義の文化、異なる地域の諸文化の――だったのかについて、依然として十分な知識を持ち合わせてはいないのである。「扱いにくい」農民に対応していたのはいかなる党なのだろうか。それは農民にとっても「扱いにくい」党だったのだろうか。筆者はかつて「御しがたい」農民と浸透の比較的容易な「散漫な」党の組合せが、一九三〇年代前半の党に固有の強さと弱さを与えていたと述べた。[64]

われわれが中国革命について語ってこなかった領域はかくも広大である。われわれはこの領域について足を踏み入れ、研究領域の境界を広げる必要がある。この新しい研究の方向性を、仮に革命に関する「下からのアプロ

ーチ」と呼んでも、名称が今ではあまりにも月並みとなったという点を除けば、さしたる反対はあるまい。この新しいアプローチは、どちらかといえばミクロな調査に基礎を置き、共産党の意図よりは意図と現実の乖離を、党による革命過程の統御よりは統御不能の側面を、共産党の勝利に向かう着実な歩みよりは革命過程の不確実性を、党と農民の強固な同盟よりは不安定でうつろいやすい関係を、革命による農村社会の断絶よりは執拗な連続性を好んで描き出すであろう。

こうすることで、われわれは従来の革命の物語を書き換えつつあるのだろうか、それとも細部をいたずらに付け加えているだけなのだろうか。あるいは、結局は従来の政治史に帰ってくることになる壮大な回り道をしているだけなのだろうか。この問題にはっきりと答えることは難しい。だが、少なくとも次の点ははっきりしている。すなわち、革命に関する「下からのアプローチ」は、従来の「上からの」アプローチの厳密な意味での代替的戦略として提示されるべきではないということである。というのも、従来の「上からの」アプローチ（あるいは「共産党中心アプローチ」）を後景に押しやれば、結局、われわれが引き出す結論は、中国革命においては革命勢力の意図が貫徹せず、しばしば統御不能であり、不確実性に満ち、農民は従わず、農村は変わらなかったという極端な言説に――従来の公式党史の言説の裏返しに――近づくことになるだろう。それでは、共産党に全国的権力を与えた政治変動がほとんど視野からは締め出されてしまう危険性があるのである――一九四九年一〇月に生じた出来事にほとんど意味はなかったというのなら話は別なのだが。したがって、われわれは「下からのアプローチ」を、つねに広い文脈に接合する努力を必要としているのである。こうもいえるかもしれない。「下からのアプローチ」の成功は、それが広い文脈に関連づけられる度合いによって測られる、と。革命を中国固有の歴史的文脈の中にもう一度埋め戻す努力を行なうこと、これが第三の点である。

この点で、P・デュアラとR・サックストンの研究は、革命の発生と中国固有の歴史的条件とを接合しようと

試みた好例である。[65] 彼らの議論はともに、共産主義者の農村への浸透以前に、国民政府が中国の歴代諸王朝がなしえなかった基層社会の掌握を試みていた点を強調している。そして、このような近代国家建設の努力が、農村においてすでに国家と農民の間の先鋭な対立を生み出していたというのである。したがって、共産党が捉えたのは、政治的に休眠状態にある無気力で、受動的で、バラバラな農民ではなかった。共産党が革命の隊列に引き込んだのは、国家と闘う意欲をもち、また組織的に闘った経験と戦術のレパートリーを備えていた人々だったというのである。とりわけ、サックストンは冀魯豫辺区におけるローカルな革命状況を、より大きな文脈に結びつけて描いてみせた。彼によれば、清末以降、河川の改修や堤防工事がおろそかになったことから、川の氾濫が増え、穀物生産に適さないアルカリ土が広がっていた。そのために、農民は塩の生産に活路を見出した。折しも、軍閥混戦で海の塩が手に入りにくくなったために、農民には商売上の好機が生まれていたのであった。そこへ帝国主義の侵略に直面して中央集権国家の建設を急ぐ国民党が高い税金を課し、農民の反抗を引き起こしていた。このような事態の連鎖を描くことによって、サックストンの作品は、ローカルでミクロな革命状況を、より広い――全国的、さらには国際的な――文脈に、かつ歴史的に長いタイム・スパンのなかに位置づけることに成功している。[66]

とはいえ、この議論はどこか宿命論的に響く。これでは国民党が、まるで共産党に歴史の舞台の主役をあけわたすためだけに登場した端役のように映る。国民党は共産党のために革命の種子を播き、収穫を共産主義者の手に委ね、そして共産党はそれを難なく刈り取ったかのようである。だが、国民党がなりふりかまわぬ中央集権国家の建設に着手したとき、共産党の勝利はすでに予見できるものになっていたのだろうか。筆者には、一九四九年一〇月のクライマックスへと向かう革命の物語が、いつの時点で不可逆的となり、確定したかをいうことはできない。この物語には、この小論が何度となく強調した不確実性がつねに影のようにつきまとっていたのである。

不確実性を強調すれば、構造と対話することなど無理であろうか。構造の物語とアクターの物語は、一方が必然を、他方が自由を強調するがゆえに、本質的に両立しがたいのかもしれない。だが、結局われわれは両者の間を往復することでしか革命を語ることはできないだろう。

（1） この小論と同様の研究史的整理はすでにいくつか試みられており、この論文も以下の文献から多くの示唆を受けている。"Introduction: Perspectives on the Chinese Communist Revolution," by Kathleen Hartford and Steven Goldstein in Hartford and Goldstein, eds., *Single Sparks: China's Rural Revolutions* (Armonk, N. Y.: M. E. Sharpe, 1989); Jeffery N. Wasserstorm, "Toward a Social History of the Chinese Revolution: A Review," *Social History*, vol. 17, no. 1 (January 1992) and no. 2 (May. 1992); Mark Selden, *China in Revolution: The Yenan Way Revisited* (New York: M. E. Sharpe, 1995), "Epilogue"; Lucien Bianco, "Peasant Responces to CCP Mobilization Policies, 1937-1945," in Tony Saich and Hans van de Ven, eds., *New Perspectives on the Chinese Communist Revolution* (Armonk, N. Y.: M. E. Sharpe, 1995). だが、日本の研究成果をも視野に収めて研究史的回顧を行なったものはほとんどない。

（2） 例えば、高橋伸夫「中国共産党組織の内部構造――湖北省、一九二七年～一九三〇年――」、『法学研究』第七一巻第五号（一九九八年五月）、「根拠地における党と農民――鄂豫皖根拠地、一九三一年～一九三五年――」（一）（二）、『法学研究』第七三巻第三号（二〇〇〇年三月）、第四号（二〇〇〇年四月）。

（3） Chalmers Johnson, *Peasant Nationalism and Communist Power: The Emergence of Revolutionary China, 1937-1945* (Stanford: Stanford University Press, 1962).

（4） Suzanne Pepper, *Civil War in China: The Political Struggle, 1945-1949* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 1999), p. xxi.

（5） Selden, *op. cit.*, p. 233.

（6） Chen Yung-fa, *Making Revolution: The Communist Movement in Eastern and Cenral China, 1937-1945*

(Berkeley: University of California Press, 1986), p. 34.

(7) Elizabeth J. Perry, *Rebels and Revolutionaries in North China, 1845-1945* (Stanford: Stanford University Press, 1980), p. 87.

(8) Lyman Van Slyke, "The Chinese Communist Movement During the Sino-Japanese War, 1937-1945," in John K. Fairbank and Albert Feuerwerkwer, eds., *The Cambridge History of China*, vol. 13 (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), pp. 680-681.

(9) Ralph A. Thaxton, Jr., *Salt of the Earth: The Political Origins of Peasant Protest and the Communist Revolution in China* (Berkeley: University of California Press, 1997).

(10) Perry, *op. cit.*

(11) 高橋「根拠地における党と農民」(一)、二〇―二四頁。

(12) 田中恭子『土地と権力――中国の農村革命』名古屋大学出版会、一九九六年、五頁。

(13) M・セルデンも陝甘寧辺区が特異な地域であった点を認めている。だが、彼は陝甘寧辺区が革命の理論と実践にとって基本的なパターンを作り出したと主張している。Selden, *op. cit.*, p. 223.

(14) Chen Yun-fa, "The Blooming Poppy Under the Red Sun: The Yenan Way and the Opium Trade," in Tony Saich and Hans van de Ven, *op. cit.*

(15) 「封建迷信」、廟会、集市などを利用した党の宣伝、動員については、丸田孝志氏による興味深い考察がある。丸田孝志「陝甘寧辺区の記念日活動と新暦・農暦の時間」、『史学研究』二二一号(一九九八年七月)。

(16) Selden, *op. cit.*, pp. 237-39.

(17) 「秘密結社を利用せる熱南地方の赤化工作」、『剿共指針』第六号(一九四一年一二月一日)、岡村部隊気付黄城事務所、二二―二三頁。

(18) 田中、前掲書、第二章および終章。

(19) 丸田孝志「抗日戦争期における中国共産党の鋤奸政策」、『史学研究』一九九号(一九九三年二月)。

(20) Wasserstorm, "Toward a Social History of the Chinese Revolution," part II, pp. 314-15.

(21) ミグダルは、「社会的交換」(social exchange) の概念を中心に据えて革命運動への農民の参加を説明しようとした。Joel S. Migdal, *Peasants, Politics, and Revolution: Pressures toward Political and Social Change in the Third World* (Princeton: Princeton University Press, 1974), p. 238.

(22) 以下の誘因は、①を除けば、いずれも本来的に革命を志向しているわけではない。またそれらは必ずしも共産党だけが提供しえたというわけでもない。したがって、党と農民の「社会的交換」はたんなる二者の間のゲームではなく、場合によっては対抗的誘因を提供しうる他の諸勢力——国民党、日本軍、匪賊集団、秘密結社など——の介入を視野に入れたうえで再構成する必要があるのである。対抗勢力の重要性に関しては、Kathleen J. Hartford, "Step by Step: Reform, Resistence, and Revolution in Chin-Ch' a-Chi Border Region, 1937-1945 (Ph. D. dissertation, Stanford University, 1980), p. 650. に有益な指摘がある。

(23) Migdal, *op. cit.*, p. 228. これらの誘因は同程度の即効性を持っていたわけではない。同一の誘因でも、農民が置かれていた状況によって効力、および効き目の早さには違いが生じただろう。だが、それにもかかわらず、これら誘因のなかで、土地が有していた即効性は相対的に低いものだったと思われる。というのも、たとえ土地を手に入れたとしても、潅漑設備、種子、役畜などが欠如していれば、収穫の見込みはほとんど無くなってしまうからである。分配された土地が著しくやせていたり、居住地から遠く離れていたりする場合も、農民にとっての魅力は小さいものにとどまる。

(24) Hartford, "Step by Step," pp. 128-29.

(25) *Ibid.*, p. 128.

(26) Chen, *Making Revolution*, p. 501; 高橋「根拠地における党と農民」(二)、三六頁。

(27) Hartford, "Step by Step," p. 36.

(28) Bianco, "Peasant Responces," p. 180.

(29) 田中、前掲書、一〇六頁。

(30) Hartford, "Step by Step," p. 594.

(31) 田中、前掲書、一一四－一一五、一一八頁。田中氏は、土地改革における「左傾」が主として「上から」来ると

主張するが（前掲書、終章）、このような農民の行動様式を考慮に入れるなら、「左傾」への重要な契機は「下から」も来ると考えたほうがよいように思われる。

(32) Hartford, “Step by Step,” p. 56; pp. 650-52.

(33) 田中、前掲書、九九－一〇〇頁。ただし、田中氏はこのことが共産党勝利の原因だと述べているわけではない。

(34) 日本の研究状況については、Wasserstorm, “Toward a Social History of the Chinese Revolution,” part I, p. 7. に短いが有益な考察がみられる。

(35) 「湖南農民運動視察報告」（一九二七年二月一八日）、日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』第2巻、勁草書房、一九七一年、四八七頁。

(36) Eric Wolf, *Peasant Wars of the Twentieth Century* (New York: Harper & Row, 1969), pp. 291-93.

(37) Bianco, “Peasant Movement,” pp. 324-25.

(38) Hartford, “Step by Step,” p. 496. また、佐藤宏「農村変革と村落形成――陝北農村の事例から――」、小林弘二編『中国農村変革再考――伝統農村と変革――』アジア経済研究所、一九八七年、一三九頁も参照のこと。

(39) 高橋「根拠地における党と農民」（一）、一七－一八頁。

(40) 小林弘二氏は、中国農村の階級構造の特質を、「階層間の流動性が大きいにもかかわらず両極分化が妨げられている」と表現している。小林、前掲書、七二八頁。

(41) 高橋「根拠地における党と農民」（一）、三六頁。

(42) 田中恭子氏は、統一戦線政策のもとでも、実際には過酷な階級闘争が進行していた様子を詳細に描き出している。田中、前掲書、第二章。だとすれば、党が排除しようとした階級が革命過程を操作する余地は著しく狭まっていたかもしれないが、だからといって完全に無くなっていたかどうかは疑問である。

(43) Bianco, “Peasant Responses,” p. 181. また、“Peasant Movement,” pp. 314-15. にも世代が果たした役割の重要性に関する興味深い指摘がある。

(44) 高橋「根拠地における党と農民」（二）、四七－五〇頁。

(45) James Scott, *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia* (New

Haven: Yale University Press, 1976).（高橋彰訳『モーラル・エコノミー』勁草書房、一九九九年。）

(46) Samuel Popkin, *The Rational Peasant: The Political Economy of Rural Society in Vietnam* (Berkeley: University of California Press, 1979). なお、農民と政治変動との関連をめぐる議論の研究史的整理については、恒川恵市「第三世界の農村と政治体制――理論の現状と研究の課題――」、日本政治学会編『年報政治学一九八六年第三世界の政治発展』岩波書店、一九八七年、加納啓良「農民革命の政治社会学――東南アジアからの試論――」、坂本義和編『世界政治の構造変動3――発展』岩波書店、一九九五年、がある。

(47) James M. Polachek, "The Moral Economy of the Kiangsi Soviet," *Journal of Asian Studies*, vol. XLII, no. 4 (August 1983), pp. 815-22.

(48) 例えば、安都根「査田運動再考――江西ソビエト革命運動の歴史的意義をめぐって――」、『現代中国』第七二号（一九九八年一〇月）、一六〇頁を参照のこと。

(49) Perry, *op. cit.*, p. 238; Chen, *Making Revolution*, pp. 514-15; Selden, *op. cit.*, pp. 240-41.

(50) Perry, *op. cit.*, p. 257.

(51) Barrington Moore, Jr., *Social Orijins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant in the Making of the Modern World* (Boston: Beacon Press, 1966), pp. 480-82.（宮崎隆次・森山茂徳・高橋直樹訳『独裁と民主政治の社会的起源』II、岩波書店、一九八七年、二〇四頁。）Wolf, *op. cit.*, pp. 295-99.

(52) 加納、前掲論文、一〇四頁。

(53) 高橋「根拠地における党と農民」（二）、六〇頁。

(54) 佐藤宏、前掲論文、一四三頁。

(55) 川井伸一「土地改革にみる農村の血縁関係」、小林、前掲書、第五章。

(56) Key Ann Johnson, *Women, the Family and Peasant Revolution in China* (Chicago: The University of Chicago Press, 1983), pp. 82-87.

(57) Perry, *op. cit.*, p. 233. だが、陳永発は、伝統的リーダーシップと個別主義的紐帯は党の発動した運動を生きのびることができなかったと述べている。Chen, *Making Revolution*, p. 497.

(58) 「中国共産党員の鑑別法――俘虜取り調べによる体験に基づきて――」、『剿共指針』第四号（一九四一年一〇月一日）、五四頁。また、「共産党員訊問の要領」によれば、共産党員は「一種の英雄的志士的自負心、虚栄心が強く、一般俘虜の模範たらんとするが如き態度がみえた」という。同上、第二号（一九四一年八月一日）、二四頁。

(59) 青年と女性の振る舞いについては、高橋「根拠地における党と農民」（二）、四七－五〇頁を参照のこと。

(60) 川井、前掲論文、二一七頁。

(61) 高橋「根拠地における党と農民」（二）、四七頁。

(62) ビアンコは、党と農民の間の非対称的な関係を指して「不平等な同盟」と表現している。Bianco, "Peasant Movement," p. 305.

(63) 高橋「根拠地における党と農民」（一）、第二章。

(64) 同右（二）、六〇－六一頁。

(65) Prasenjit Duara, *Culture, Power and the State: Rural North China, 1900-1942*, (Stanford: Stanford University Press, 1988); Thaxton, *op. cit.*

(66) Thaxton, *op. cit.*, pp. 17-18; p. 40.